季刊
春号

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM QUARTERLY

URL https://general-museum.fcs.ed.jp/

136
最終号

春の企画展

ふくしまの旅
— 懐かしの景色を訪ねて —

福島県立博物館

福島県史蹟名勝鳥瞰図（「観光の福島県」のうち、部分・当館蔵）

春の企画展

ふくしまの旅 ―懐かしの景色を訪ねて―

東北汽車旅行振分双六（永山祐三氏蔵）

会津若松市 パンフレット（個人蔵）

福島県のお土産・民芸品（当館蔵）

企画展紹介

みなさんは福島県の温泉地、観光地と聞いてどこを思い浮かべますか？

広大な県域に点在する美しい自然や数多くの史跡、旅の疲れを癒す温泉地…。

これらが観光地として知られるようになったのは、大昔のことではありません。

明治時代に鉄道が敷かれ、人々が気楽に移動できるようになってからのことです。

東北有数の温泉地・飯坂温泉。

お城と白虎隊のまち・会津若松。

炭鉱業から観光業へ転換したまち・いわき湯本。

雄大な自然を観光資源とした磐梯吾妻・猪苗代地域。

本展では特にこれらの温泉・観光地に焦点をあてて、それぞれの発展の過程を辿ってみたいと思います。

旅人を運んだ鉄道関係の資料と絵葉書、鳥瞰図、旅館のパンフレット、お土産といった旅の資料の数々が大集合。

明治・大正・昭和。ちょっと昔のふくしまをめぐる旅へ行ってみましょう。

いざ、懐かしのふくしまへ！

展示構成

序　章　歩いて出発、のんびりと　～徒歩の旅～

徒歩が主な移動手段だった時代の旅道具などを紹介します。

第1章　速いぞ列車、もうすぐだ　～鉄道の登場～

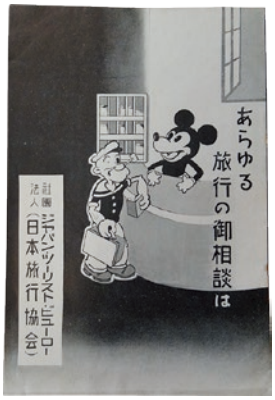
磐越西線や常磐線、東北本線など県内を走る鉄道の歴史を紹介します。記念切符や駅弁の掛け紙も見所。

電車座席455系用
（東北福祉大学鉄道交流ステーション蔵）

特急あいづ（上野駅）写真（吉田博行氏撮影・提供）

常磐ハワイアンセンター 絵葉書（個人蔵）

東山温泉パンフレット
（当館蔵）



あらゆる旅行のご相談は
（菊田貞吾氏蔵、東北歴史博物館寄託）

岩越鉄道名勝案内（当館蔵）

一切経山より望む吾妻小富士の景観 絵葉書（当館蔵）

摺上ノ深淵ト十綱橋 絵葉書（当館蔵）

会　期：令和2年4月29日（水・祝）～6月28日（日）
主　催：福島県立博物館
会　場：福島県立博物館 企画展示室
観覧料：一般・大学生 500円（20名以上の団体400円）、高校生以下無料

第2章　ふくしま到着、どこ回ろう
～温泉地・観光地の歴史を辿る～

絵葉書やパンフレット、鳥瞰図、お土産などから飯坂温泉や会津若松、磐梯吾妻スカイライン、裏磐梯、常磐ハワイアンセンターの歴史をご紹介。

終　章
魅力いっぱい、また来よう　～ふくしま旅行の今～

現在の福島県の観光情報をご紹介。
さらに…
観覧記念の撮影スポットや鉄道模型Nゲージの展示もあります。お楽しみに！

イベント

◆ワークショップ「フィルムカメラを知る・撮る・楽しむ」
日　時：5月10日（日）10時～15時30分
講　師：写真とカメラ サイトウ
会　場：実習室・鶴ヶ城公園
定　員：10組、要申込、参加費：2，000円

◆記念講演会「鉄道と観光の近現代史」
日　時：5月17日（日）13時30分～15時
講　師：老川慶喜氏（立教大学名誉教授）
会　場：講堂
定　員：先着200名、申込不要、参加無料

◆バスツアー「裏磐梯に託した想い～遠藤現夢のゆめ～」
日　時：6月7日（日）9時～16時
講　師：佐藤公氏（磐梯山噴火記念館 館長）
竹谷陽二郎氏（磐梯山ジオパーク協議会 運営委員長）
弦巻優太（当館学芸員）
定　員：22名、要申込、参加無料（昼食代は別途）

◆当館学芸員による展示解説会（いずれも13時30分～14時30分）
4月29日（水・祝）
5月3日（日・祝）、4日（月・祝）、5日（火・祝）、16日（土）、30日（土）
6月13日（土）、28日（日）
＊要観覧料もしくは年間パスポート

特集展レポート

震災遺産を考える
―それぞれの9年―

会　期：令和2年2月11日(火・祝)～4月12日(日)
主　催：福島県立博物館

毎年テーマを変えながら、続けてきた特集展です。今年は人に注目をしました。7人のお話とともに、9年を振り返りました。

特集展を続けてきたことで、来館者から資料に関わるお話を教えていただくこともあり、資料自体が育っていくことも震災遺産の特徴の一つでした。今回は受動的ではなく能動的に資料に関する物語を聞きに行きました。結果として収集・保全した時点で時が止まったような資料でしたが、9年の空白を埋めて歴史資料としての厚みを増したのではと考えています。未来へ資料を残すことが博物館の役割でもあります。災害とは自然現象に、人々の暮らし、社会生活が被害を受けることで成立します。つまりは人との関わり、人の歴史を災害史として残すことが大切であると考えています。

牛がかじった牛舎の柱　レプリカ

ストーブを囲むパイプ椅子

会場の入り口では、牛舎の柱を展示しました。説明がなければねじ曲がっただの柱にしか見えません。ですが、餓死するまでかじられたであろうこの柱に刻まれた命へ執着と飼い主の無念を証言とともに確認することができたはずです。博物館で初披露となったこの資料の反響は大きく、新聞やニュースなどで多く取り上げられました。

解説会では、被災地に想いを馳せ、涙ぐまれる方もいらっしゃいました。また来場された方の意見として、アンケートでは「(忘れないためにも)県内外問わず多くの人に見てほしい」との声をたくさんいただきました。令和2年度は冬に企画展「震災遺産を考える」を開催します。今までの成果をまとめ、みなさんとともに震災遺産を考える場となればと思います。

今回は人に焦点をあてましたが、結果として資料が持つメッセージが今までより少し成長し、次の世代へ残したい教訓も加わりました。人の言葉が加わった震災遺産をまた違った視点で考える機会となった「それぞれの9年」でした。震災遺産は博物館の資源として、この地に住む次の世代の、未来づくりの役に立つものでありたいと考えています。

今回も多くの皆さんからご協力いただき特集展を開催することができました。また東日本大震災・原子力災害伝承館に収蔵予定の資料についても(公財)福島イノベーションコースト構想機構より後援いただき展示することができました。ご協力いただいたみなさんに感謝申し上げます。

(震災遺産担当：筑波匡介)

展示解説会

展示解説会

大熊町の記憶（フロッタージュ作品）

館長退任にあたって

心からの感謝をこめて

赤坂　憲雄

十七年間、館長という職を務めた福島県立博物館を離れることになりました。たしかに感慨深いものはありますが、悔いといったものはなく、安堵の思いのほうが強いかもしれません。激動の時代でした。経済が低迷するなかで、博物館とかぎらず文化施設はどこも厳しい予算削減の波に洗われ、運営基盤が揺らぎはじめていました。いずれ、県直営の施設にも管理委託という制度が導入されるかもしれない、という声が聞こえてきました。そして、東日本大震災に襲われると、もはや博物館の使命や役割は大きく変わらざるをえないことが、誰の眼にも明らかになりました。翻弄される日々であったかと思います。

二〇〇三年四月、わたしは佐藤栄佐久知事（当時）にお声がけをいただき、博物館という未知なる世界に足を踏み入れました。そのとき、わたしはまったくの素人にすぎず、館長という役割がなにを意味しているのかすら、およそ理解していませんでした。そもそも館長とは呼ばれていても、名誉館長のようなもので、これといって特別な仕事はありませんでした。どうやら予算や人事にかかわる権限は皆無であることには、ずっと後になって気づきました。

それなりに大きな組織であり、全貌らしきものはなかなか把握することができませんでした。だれが、どこで、どのような議論を重ねて、企画や運営の方針などが決められているのか、それが見えませんでした。おそらく、予算が潤沢にあり、それぞれに専門性にプライドを持つ学芸員たちが運営の現場を固めていましたから、阿吽の呼吸ですべてが動いていたのでしょう。しかし、博物館を取り巻く状況は流動化し、激変しつつありました。それなのに、公共の文化施設としての将来のあり方といったものを議論する場はありませんでした。そこで、わたしは怖ず怖ずと、すべての学芸員スタッフが集まって議論をする場をつくりたいと提案しました。そうして学芸員会議が生まれて、それはいつしか福島県立博物館の合議と意思決定の場になっていきました。わたしははじめて、博物館の運営と管理にかかわる大きな流れが透明化されるきっかけができて、ホッとしたものです。

それから、公共施設として外部からの評価認定を受けられるように、福島県立博物館としての使命を明らかにし、中期目標を定めて、評価実績を検証する制度をつくることを提案しました。それはスタッフの尽力によって形になりました。職人的に能力が高い学芸員が揃っていたのです。あるいは、予算がいつの間にか半減の状態となり、もはや資料の収集・調査研究・展示という博物館活動の基本的なプロセスすら維持できなくなり、避けがたく外部資金の導入に向けての模索が始まりました。これはしかし、それまで県博の活動のすべては県の予算でおこなわれてきましたから、なかなか理解されませんでした。しかし、やがて特別展の開催すら困難となり、県の内外の施設との提携、文化庁による助成金その他、さまざまな外部資金の導入が当たり前になっていきました。逆にいえば、外部とのさまざまな繋がりを持たなければ特別展示がおこなえない状況が生まれたのです。結果として、若い学芸員が企画を立てることがむずかしくなり、経験の継承と教育のシステムが弱体化してしまいました。見えないところで、博物館という場所は変容を強いられてきたのです。

リニューアル問題が懸案のままに残されていることは、気がかりです。しかし、それは若い世代に託すしかありません。もはや、豊かな時代の成功体験は通用せず、ようやく見えてきた、地域に開かれた、地域の人々とともに創る学びの広場といった博物館の将来像に向かって、それぞれの現場から創意工夫を凝らして突き進んでゆくしかないのです。

それにしても、福島県立博物館の館長という職は、専門性と技能を有する学芸員にたいする敬意と信頼のうえに、かれらの思いと活動を支え、最終的な責任だけは取る、あくまで名誉館長なのだと理解するようになりました。十七年前の春に、館長職の引き継ぎのためにお会いしたときに、高橋富雄前館長からいただいたメッセージが、まさしくそれに尽きていたことをいまになって思いだしています。

福島県立博物館は離れますが、いましばらくは会津で文化や芸術にかかわる仕事を続けてゆきたいと願っています。外からは、この博物館はどのように見えるのでしょうか。県民の皆さんから、いかなる博物館であることを期待されているのでしょうか。福島県立博物館がいまよりもっと広く、深く、福島の人々に愛される博物館になることを、心より願っています。そのためにも、広やかな世界に向けて感度のいいアンテナを立てられることを。

最後になりましたが、厳しい環境のなかで、ともに福島県立博物館を支えてくださった館の内外のみなさんに、そして、なによりもこの博物館を愛し応援してくださった県民のみなさんに、心からの感謝の思いを伝えさせていただきます。ありがとうございました。

二〇二〇年三月

福島県立博物館館長　赤坂憲雄

『博物館だより』から新広報紙『なじょな』へ

福島県立博物館の『季刊　博物館だより』は、昭和61（1986）年8月15日に創刊号を発行して以来、今号まで136号を数えます。創刊号は、10月18日のオープンを間近に控えた開館直前号でした。創刊号から連載「博物館のはたらき」（全9回）があり、展示会のみならずバックヤードを含めた博物館の専門性を広報する側面も持っていました。また初期から「公民館活動と博物館」等の館外からの寄稿、あるいは障がい者団体の来館などの記事がみられ、学校教育・社会教育との連携や、開かれた博物館への取り組みは、開館以来の初志であることが分かります。

『博物館だより』のデザインや構成が現行と近い形式になったのは、12号（平成元（1989）年5月号）からです。当初はB5サイズ・モノクロでしたが、この号から2色刷りに。また、「研究ノート」や「Q&A」など現在までつながるコーナーも始まりました。その後、A4サイズへの変更やフルカラーなど、より読みやすい体裁・デザインへと変化しています。

展示図録ほどでなくとも、それぞれの学芸員の興味関心・研究テーマや、専門的な知識をわかりやすく解説するという役割を持っていた『博物館だより』。全8ページで、無料の広報物としてはとても読みごたえのあるものであったと思います。ファイリング用の穴もあり、一過性のイベント情報ではなく、後から読み返しても参考になる記事が多くあります。

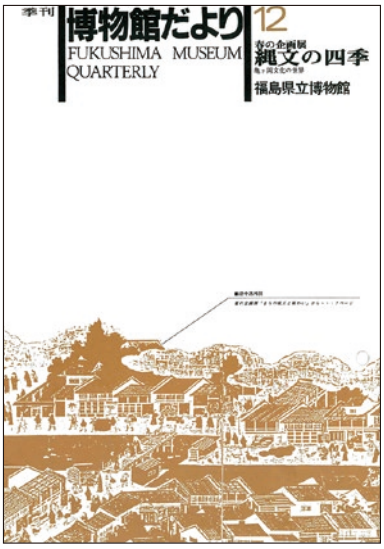
博物館だよりのおもな送付先は日本全国の博物館のほか、友の会や資料の借用先の方々で、季節ごとの個別のダイレクトメールという性格もありました。その反面、部数はやや少なかったかもしれません。47号（平成10（1998）年）当時ですでに、「まだまだ一般的には目にする機会が少ない」という意見もあり、当時からの課題でもあったことが伺えます。

福島県立博物館は考古・歴史・美術・民俗・自然・保存科学、さらに近年では震災遺産、と様々な専門性を持ちつつ、開かれた博物館を目指してミュージアムイベント・子育て世代向けの事業等々、本当に多彩な取り組みを行っています。現代において館の活動を伝える広報媒体は、印刷物だけではもちろんありません。ですが紙の現物を手に取って、広げてご覧いただくということは、興味関心以外の情報も併せて目に入る、あらゆる学びの可能性や様々なイベントとの出会いの機会でもあります。広報紙はみなさんの知的な宝の地図でありたい、そう思います。

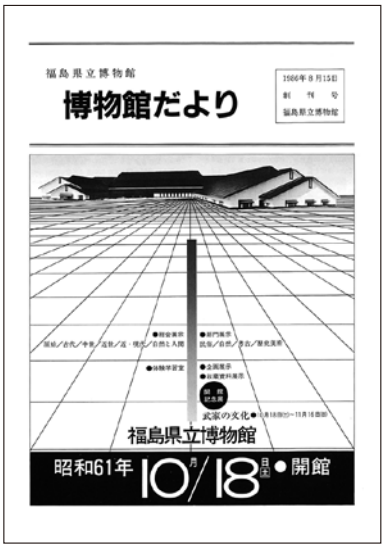
『博物館だより』は今号を最後に、新たな広報紙『なじょな』として生まれ変わることになりました。今までの良い点を引き継ぎながら、紙面も大きく、もっと多くの方々に手に取っていただける形を目指して、担当者一同、準備を進めています。ぜひあなたの学びの地図として、お手元に置いていただけませんか。

（学芸課　連携交流班：大里正樹）

※61号（平成13（2001）年7月）以降のバックナンバーは、当館のWebサイトでもPDFで引き続きご覧いただけます。

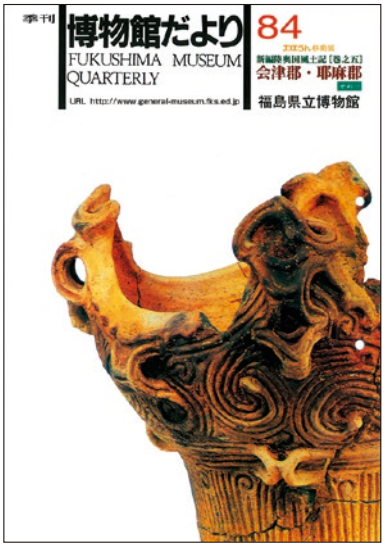


モノクロから2色刷りに（12号）



創刊号

印象的な表紙デザイン（120号）



初のフルカラー（84号）

新しい広報紙『なじょな』について

令和2年度から当館の広報紙が新しくなります。その名も「なじょな」。「どんな」を意味する方言です。展覧会の魅力やイベント詳細はもちろん、最新ニュースやおすすめ情報・スタッフ紹介など、博物館をより身近に感じ、「次はどんな?」と楽しみにしていただける、そんな紙面をめざします。ご覧頂いた感想など、ぜひ「なじょな」ご意見もお寄せください！ 紙面づくりや博物館の運営に反映させていきます。

「なじょな」は時期によるイベント数の多少に応じて2ヶ月もしくは3ヶ月に1回発行します。年間では6回の発行（イベント号、4～6月号、7・8月号、9・10月号、11・12月号、1～3月号）を予定しています。記念すべき創刊号は、2020イベント号。令和2年度に行われる当館のイベントがまるっと分かります！(*) 当館のイベントは、学芸員の専門性を生かした特色ある講座から体験型講座・コンサートまでバリエーション豊か。展示解説会などを含めると、100回を超えるイベントを企画しています。創刊号をお手元に置いて、ぜひ、あなたの一年間のおともにして下さいね。

なお「なじょな」の第2号は7・8月号となります。どうぞお楽しみに。

＊企画展関連行事は、春の企画展「ふくしまの旅」関連のみ掲載しています。それ以降の企画展関連行事については、それぞれ企画展チラシや当館ホームページなどでご案内していきます。

（学芸課　連携交流班：阿部綾子）

企画展予告

会津のSAMURAI文化

会　期：令和2年7月18日(土)～9月13日(日)
会　場：企画展示室

中世にはじまり幕末にいたる武家社会の中で、会津の地に育まれ、積み上げられてきたSAMURAI文化の伝統を、多彩な展示資料を通してご覧いただきます。

歴代の城主たちが文武の素養を兼ね備えていたことを示す武器・武具類や、茶の湯、絵画、和歌・連歌に関する名品・逸品を展示します。また家臣となった多くの侍たちが、泰平の世の中にあっても、武芸や学問・知識を磨いていたようすを、軍事訓練である追鳥狩を描いた屏風や、藩校・日新館の絵図などから読み解いてゆきます。彼らの活動の舞台となった若松城や城下町のようすは絵図・地図や発掘された資料からご紹介します。

SAMURAIたちの世の中であった時代にスポットを当て、会津の魅力満載の企画展を目指します。

（分野合同　担当：高橋充）

日新館教授の図（部分 当館蔵）

国宝 短刀 銘 国光〈名物会津新藤五〉（ふくやま美術館蔵 小松安弘コレクション）

information

企画展・特集展　企画展示室　★は要申込

特集展　震災遺産を考える　―それぞれの9年―

～4月12日(日)
料金：無料

■展示解説会
4月11日(土)13時30分～14時
講師：当館学芸員

企画展　ふくしまの旅　―懐かしの景色を訪ねて―

4月29日(水・祝)～6月28日(日)
料金：一般・大学生500円、高校生以下無料

■ワークショップ
(要申込、定員10組、2,000円、実習室・鶴ヶ城公園)

★「フィルムカメラを知る・撮る・楽しむ」
5月10日(日)10時～15時30分
講師：写真とカメラ　サイトウ

■記念講演会(申込不要、先着200名、無料、講堂)

「鉄道と観光の近現代史」
5月17日(日)13時30分～15時
講師：老川慶喜氏(立教大学名誉教授)

■バスツアー(要申込、定員22名、無料、昼食代別途)

★「裏磐梯に託した想い～遠藤現夢のゆめ～」
6月7日(日)9時～16時
講師：佐藤公氏(磐梯山噴火記念館　館長)
竹谷陽一郎氏(磐梯山ジオパーク協議会　運営委員長)
弦巻優太(当館学芸員)

■**展示解説会**(申込不要、要観覧料、企画展示室)
4月29日(水・祝)
5月3日(日・祝)、4日(月・祝)、5日(火・祝)、16日(土)、30日(土)、
6月13日(土)、28日(日)
13時30分～14時30分
講師：当館学芸員

企画展　会津のSAMURAI文化　プレイベント

■野外講座(要申込、定員30名、参加費50円、鶴ヶ城公園)

★「鶴ヶ城の石垣を見る、歩く」
6月21日(日)9時30分～12時
講師：近藤真佐夫氏(会津若松市教育委員会)
当館学芸員

テーマ展　部門展示室　常設展料金

けんぱくの宝2020　旅によせて

部門展示室　歴史・美術
4月18日(土)～6月14日(日)

美しき刃たち―会津編
部門展示室　歴史・美術
6月27日(土)～9月13日(日)

ポイント展　総合・部門展示室　常設展料金

郷土玩具で旅するニッポン

部門展示室　民俗
4月17日(金)～6月24日(水)

宇都宮・会津仕置430周年記念①
道中絵図にみる秀吉の通った道
総合展示室　近世
4月29日(水・祝)～6月28日(日)

■ミニ解説会
6月26日(金)13時30分～14時
講師：当館学芸員

描かれた民俗―暮らしの記録と地域の行事
部門展示室　民俗
6月26日(金)～9月9日(水)

講座・実演他

【民俗講座】
「ポイント展でまなぶ！ふくしまの民俗」
(申込不要、無料　※展示解説会参加には要観覧料、講堂・部門展示室　民俗)
①「郷土玩具で旅するニッポン」
5月24日(日)13時30分～15時
講師：山口拡(当館学芸員)

【美術講座】
「旅する美術」
(申込不要、無料　※展示解説会参加には要観覧料、講堂・部門展示室　歴史・美術)
5月31日(日)13時30分～15時
講師：小林めぐみ・塚本麻衣子・原恵理子
(当館学芸員)

ミュージアムイベント

けんぱく映画会「フラガール」李相日監督作品

(申込不要、先着200名、無料、講堂)
5月23日(土)13時30分～15時30分

「玄如節と日本の民謡　―民謡で旅するふくしま―」
(申込不要、無料、エントランスホール)
6月20日(土)13時30分～15時
出演：玄如節顕彰会のみなさん

その他

「博物館でも読み聞かせ」
(申込不要、無料、体験学習室)
4月11日(土)、5月9日(土)、6月13日(土)
11時～11時30分、15時～15時30分
講師：読み聞かせグループの皆さん

「こどもミニミニ博物館」
(申込不要、無料、体験学習室)
5月2日(土)～6日(水)
各日　10時30分～15時30分

＊新型コロナウイルスの影響により、予定が変更になる場合があります。最新情報はホームページをご覧いただくか、直接お問い合わせください。
＊企画展開催期間中は観覧料で企画展と合わせて常設展もご覧いただけるようになりました。
＊要申込の行事は基本的に開催日の1ヶ月前（1ヶ月前が休館日の場合はその翌日）から募集を開始します。電話もしくは受付カウンターでお申し込みください。
＊その他、行事等の詳細に関しましては、新広報紙「なじょな」およびホームページをご覧ください。

4～6月の休館日
4月6日(月)・13日(月)・20日(月)・27日(月)
5月7日(木)・11日(月)・18日(月)・25日(月)
6月1日(月)・8日(月)・15日(月)・22日(月)・29日(月)・30日(火)

【お問い合わせ先】福島県立博物館
〒965-0807 会津若松市城東町1-25
Tel 0242-28-6000　Fax 0242-28-5986
HP https://general-museum.fcs.ed.jp
Mail general-museum@fcs.ed.jp

季刊博物館だより　136号　2020年3月26日発行　編集・発行：福島県立博物館　デザイン・印刷：株式会社 アポロ